

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成13年度日本語教育上級研修報告

雑誌名	日本語教育論集
巻	18
ページ	62-65
発行年	2002-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00001906/

平成 13 年度日本語教育上級研修報告

1. 趣旨

20 世紀後半の国際社会は、地球規模の人的移動や情報流通の拡大により、様々な交流と接触の場面を生み出してきた。日本語教育はこうした社会状況の変化に伴い、急速に多様化が進み、従来の枠組みでは対応しきれない多くの問題に直面している。これらの問題を解決するためには、まず現実の社会から乖離することなく、社会的観点に立って現状を把握し、多様化に柔軟に対応していくことが前提として必要になる。その上で、複数の人が連携して協働することにより、複数の視点で内在する諸問題を明らかにし、解決方法を具現化していくことが要請される。今、広い視野を持ち、連携に向けてイニシアチブのとれる自律的な教師が求められている。

翻って、現行の日本語教師養成を見ると、教師不足を補うための量的充実という意味では既に安定期にある。しかし、これからの教師養成は量的充実から質的充実へと転換することが不可欠である。つまり氾濫する情報の取捨選択により刻々と推移する現状を正確に把握し、教育のあり方を科学的に検証する知識や方法を身に付け、問題解決に向けて様々な立場・領域の人と連携を図り柔軟に対応していくことができる教師の養成へと、教師養成の質的転換を図る時期に来ている。

そこで、国立国語研究所日本語教育部門では、平成 13 年度より現職者を対象として、「多様化」に現実的に対応し得る力の養成を目指した新しい研修「日本語教育上級研修」を立ち上げる。新たな日本語教育の展開に向けて、常に問題意識を持って取り組み、改善のための視点・能力を持ち、自らを基点にしてネットワークを広げていける人材を育成する。

2. 目的

「日本語教育上級研修」は、広く日本語教育に関する職務に携わっている現職者を対象として、「多様化」に現実的に対応し得る力の養成を目

指し、本年度より新たにスタートしたプログラムである。日本語教育現場における実践・研究等から問題を見出し、相互交渉・共同作業を通して問題を解決する方法論を身に付け、将来に渡って日本語教育のそれぞれの分野においてリーダーシップを発揮する人材を育成することを目的としている。

3. 期間

平成 13 年 5 月 7 日～平成 14 年 3 月 8 日

4. 研修概要

<研修の基本方針>

(1)本研修は、個人を研修生として受け入れるが、申請時に組織した研修チームを単位として研修活動を実施する。

(2)本研修では、以下の二つを柱として活動を行う。

①テーマ「教育内容の改善・教育環境の整備のための方法」に基づき各チームが設定した課題を追究すること。

②情報収集・発信・共有等、他者との連携のための方法を模索し、実践すること。

(3)研修生は、各チーム内だけではなく、他のチームや研究所の研修担当者との共同作業や相互交渉を通して主体的に研修を進める。また、研究所内外の人的および物的なリソースやネットワークを積極的に研修活動に活用する。

<研修活動の内容>

(1) 各研修チームは、原則として毎月 1 回(平日)研究所において定例会合を持つ。定例会合では、各研修チームは自主的に進めてきた活動(文献研究、情報収集、計画案の作成、データ収集、実践での検討等)の進捗状況に基づき、次の活動の内容と進め方について検討を行う。

(2)研修生は、チームごとに、あるいは共同で、以下のような会を企画・実施する。

①課題に関する研究会や勉強会等(研修の進行に合わせて随時実施)

②中間発表会(公開, 1回以上)

③修了報告会(公開)

(3)研修生は、以下のものを作成し、提出する。

①定例レポート：研修活動の進行にあわせて定期的（月1回程度）に作成し、活動の進捗状況等についての内省・共有・検討のために利用する。

②修了レポート：研修成果をまとめる。

③ダイアリー：参加者個人が研修の活動に対し、「学んだこと・考えたこと・感じたこと」をダイアリーという手法で記述し、定期的に提出する。定期的に記録されたダイアリーは、自分自身の研修活動を振り返り、問題点を改善するために有効な手がかりとなる。また、チーム単位で活動することが多い研修活動に参加者個人がどのように関わっているのか、また、そのことをどのように感じているのかを研修スタッフが認識する貴重な機会となる。

5. 応募資格

(1)日本語教育の実践・研究から見出した問題を追究する熱意、能力、基礎的な知識を有すること。

(2)原則として、2～6人で研修チームを構成すること。

(3)原則として、現に日本語教育に関する職務に携わっていること。

(4)上記研修内容に沿った活動に参加できること。また、各チームの設定した課題において所属機関における教育現場を研究のフィールドとする場合は、その旨、所属機関の承諾が得られること。

(5)研修での活動経過および成果に関する資料が、研究所の行う教師教育研究の基礎資料となることを了解すること。

(6)研究所および他の研修チームとの連絡あるいは討議等に電子メールが使えること。

6. 募集方法と募集期間

平成13年2月1日より募集案内の配布とHPによる募集を開始した。配布先は各大学、日本

語教育機関、日本語教育関係団体、都道府県教育委員会等、計945機関である。

募集要項の入手方法は以下の三つを用意した。

(1)日本語教育センターのHPからダウンロードする（<http://www.kokken.go.jp/jsl/>）。

(2)電子メール（kenshu@kokken.go.jp）にて請求する。

(3)郵送にて日本語教育センター(平成13年4月1日より日本語教育部門に移行)に直接請求する。
応募書類受付期間:平成13年2月1日～平成13年3月2日（金）消印有効

7. 選考経過

応募者数：5チーム23名

第一次選考（書類）：平成13年3月6日

合格者数：5チーム23名

結果通知：平成13年3月9日

第二次選考（事前課題に基づく面接）：平成13年3月14日～19日

選考委員会：平成13年3月20日

合格者数：4チーム16名

不合格者数：1チーム7名

結果通知：平成13年3月23日

8. 全体の経過

5月12日：オリエンテーション

6月8日：文献検索セミナー

9月29日：中間発表会

2月15日：修了レポート提出期限

3月3日～8日：個人別修了面接

3月26日：修了生修了通知（3チーム11名）

4月20日：修了式・修了発表会

9. チーム別研修報告

(1)「黒崎チーム」

<修了レポート>

題目：「上級日本語学習者に対するポジショニング・マップを用いた語彙指導法の提案—印象・感想を述べる手段としての形容詞—」

<要旨>

本研究では、上級日本語学習者に対する語彙

指導の方法を検討した。取り上げたのは形容詞である。日本語能力試験一級に合格した上級学習者でも印象・感想を言うのは難しい。筆者らは、その原因は使用語彙の不足と何を感じたかが分析できないためではないかと考え、ポジショニング・マップという手段を思い付いた。ポジショニング・マップを使えば、学習者自身が感じた印象を視覚化でき(自己内省の補助)、かつそのポジショニング・マップ上に語彙を配置すれば語彙の導入もできる(語彙不足の解消)。

当初は適当な軸を設定してポジショニング・マップを作り、学習者の感じた印象をマップ上にプロットするだけだった。後に言語イメージ・スケール(小林 1990)に出会い、それに影響を受け、ポジショニング・マップに形容詞及び形容詞的表現を配置した形容詞ポジショニング・マップを作った。この形容詞ポジショニング・マップは言語イメージ・スケールと同様、Warm-Cool, Soft-Hard の2軸からなっている。この形容詞ポジショニング・マップを用いることで学習者は印象を視覚化でき、マップ上の意味を理解しやすくなる。また、形容詞ポジショニング・マップの使用を繰り返せば、印象・感想を表現するときに適当な語を選ぶのがたやすくなる。

<勉強会>

①平成 14 年 2 月 2 日

場所：国立国語研究所第一研修室

講師：岩松桂氏(日本カラーデザイン研究所)「カラーイメージスケールについて」

②平成 14 年 2 月 15 日

場所：国立国語研究所第一研修室

講師：卯城祐司氏(筑波大学)「スキーマ理論から見た語彙習得過程」

③平成 14 年 3 月 5 日

場所：国立国語研究所第一研修室

講師：吉野文氏(千葉大学)「学習ストラテジーについて」

(2)「要因チーム」

<修了レポート>

題目：「日本語学習者の環境調査と発音習得の時間的変化の研究—発音と日本語使用状況の基礎調査から見えてきたもの—」

<要旨>

本研究チーム所属日本語教育機関において、留学生は日本語を習得するという目的を持ち、日々学習を重ねている。今、入学後一年になろうとしているが、学習者の日本語の習得過程において個人差が見られる。

本研究チームはその原因の一つと思われる学習者の置かれている環境の影響と日本語習得状況に着目し調査を行った。日本語習得の方面においては、発音を中心に調査し、その習得過程の変化などを探った。また環境の方面においては、質問紙法調査、インタビュー調査などを行い、学習者の置かれている環境を把握し、その場面における学習者の日本語使用の状況を明らかにした。

その結果を踏まえ、学習者個々に応じた長期的な指導の必要性を感じ、学習者の記録を体系的に取り、教育現場への活用を目指した。今後とも本研究チームの日本語学習者に対する支援のあり方を探っていきたい。

<勉強会>

平成 13 年 10 月 21 日

場所：国立国語研究所第一研修室

講師：文野峯子氏(人間環境大学)・林さと子氏(津田塾大学)・宮崎妙子氏(武蔵野市交流教会日本語交流員)

(3)「LL チーム」

<修了レポート>

題目：「文化外国語専門学校における音声教育シラバスの開発—LL を使った音声教育教材の分析・改訂を中心に—」

<要旨>

本校では平成 12 年 10 月から LL 用発音教材(以下：発音教材)の開発を始め、平成 13 年 4 月に完成した。この教材は「アクセント」「イントネーション」「リズム」「プロミネンス」「小さい『つ』の発音」「『ん』の発音」の 6 項目からなる。これ

らの分析を行い、本校における音声教材シラバスの開発を進めることを目的として、本研修に参加した。

本レポートでは発音教材の実践を通して明らかになったことを中心にまとめた。この発音教材を使用するにあたっての教師の工夫、発音教材の実践の中で観察された学習者の様々な様子、発音教材の使用が影響していると思われる学習者の反応・変化（発音以外の普通の授業、放課後などの様子）、発音教材を使用していることを踏まえた教師の発音以外の授業での工夫、などの多くの観点から分析した。

学習者が積極的に発音の授業に参加する、発音以外の授業でも学習者が以前より発音に興味を示す、など本教材の長所が観察された一方で、発音教材の練習問題が単調である、発音教材とメインテキストとの連動が不十分だ、到達目標の設定が明確ではない、など多くの問題点があることも明らかになった。これらの問題点の改善に加え、教師や学習者からいかに有益なフィードバックを得るか、今後本校でどのような音声教育シラバスを作り上げていくかなど、多くの課題が残された。

<勉強会>

日時：平成 13 年 7 月 28 日

場所：文化外国語専門学校

講師：松崎寛氏（広島大学）・河野俊之氏（同志社女子大学）

10. 研修修了発表会

日時：平成 14 年 4 月 20 日

場所：国立国語研究所第一研修室

題目及び発表者

- (1)「文化外国語専門学校における音声教育シラバスの開発—L1を使った音声教育教材の分析・改訂を中心に—」西村 学・国頭美紀・角本浩美（文化外国語専門学校）
- (2)「日本語の習得における環境の影響」鷹觜邦子・井上好恵・大村和恵・中沖京子（東京国際学園外国語専門学校）
- (3)「上級日本語学習者に対するポジショニン

グ・マップを用いた語彙指導の提案 —印象・感想を述べる手段としての形容詞—」黒崎 誠・黒崎亜美・播岡 恵・丸山伊津紀（ラボ日本語教育研究所）